Japanese Association for Tibetan Studies

吐蕃の万戸（khri sde）について

岩尾　一史

はじめに

古代チベット帝国、吐蕃の軍事・行政制度は、幾つかの研究により明らかにされつつあり、例えば吐蕃中央に敷かれたル（ru）、周辺地域に敷かれた軍管区（khrom）、中央・周辺に共通しておかれた千戸（stong sde）制については比較的研究の蓄積がある。しかし、その他の組織の多くはいまだ研究が進んでいないのが現状で、本稿で取り上げる万戸（khri sde）もそのうちの1つである。

本稿で試みるのは、吐蕃における万戸とは何か、その規模はどの程度のものか、を明らかにする事である。また、周知の通り、万戸は遊牧国家の十進法的軍事制度においても重要な位置を占めている。吐蕃の万戸とそれとの関係についても、あわせて考察したい。

1　先行研究

トゥッチ Tucci, G. は *Tibetan Painted Scrolls* 中においてル制について概観し、「(吐蕃の)軍隊は、ちょうどトルコ、モンゴルと同様に、10,000、1,000、100、10の部に分けられていた」と簡潔に述べている（Tucci 1949, 738)。確かに、ル制の姿は北方遊牧国家特有の十進法的軍事体制とよく似ており、1つのルにはおよそ10の千戸が属している。トゥッチ自身は明記していないが、ルが「10,000の部」つまり万戸にあたると推測したのであろう。

一方、佐藤長氏は主に漢語史料によって吐蕃の軍事体制について概観しているが、上記トゥッチの意見についても触れ、「千戸は問題ないとして万戸、百戸、十戸の例は今のところ当時のチベット文献においては発見できない」と指摘している（佐藤 1958-59,756)[(1)]。氏の指摘以降、主に亡命チベット人によりインド等に持ち込まれ出版されたチベット語文献、そして1980年代から断続的に中国から発表されるチベット語文献により、我々の利用できる文献の数は飛躍的に増大したが、やはり百戸、十戸の例は全く発見できないことに変わりはない。ところが万戸については、管見のおよぶ限り一例のみ見出し得るのである（後述)。

また、中央アジアや敦煌で発見された出土文書史料には、khri sde つまり「万戸」に関する記事が幾つもみつかっている。A. スタインの収集したチベット語木簡、紙文書を研究したトーマス Thomas, F. W. は khri sde の存在を指摘し、“10,000 district” と訳している（Thomas 1951, 30; 1955, 118)。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

トーマスの業績を踏まえ、藤枝晃は敦煌出土漢語文書の「行城文」S.6101 に現れる「乞利本」、つまり khri dpon を紹介し、万戸について考察している（藤枝 1961, 219–221）。氏は沙州に万戸はなく、万戸は漢語文書に現われる「節度使」（具体的には瓜州節度使、当時沙州は瓜州節度使の管轄下にあった）であるという。しかし、次に挙げる山口瑞鳳氏の研究で分かるように、実際には沙州に万戸があった。

1980 年、山口氏は敦煌出土チベット語文書 P.t.1089 の訳注・解釈を行った（山口 1980b）。これは河西回廊一帯を支配下におくデロン議会から沙州に宛てられた下行文書であり、沙州における役人同士の序列争いについて、デロン議会が 1 つの回答を与えたものである。係争者双方（チベット人側と漢人側）の主張や、沙州の官職の経緯、特に沙州・他地域の官職序列表が詳細に記述されているので、吐蕃の制度を知る上で非常に重要な文書である。1955 年、ラルー氏が研究を行っていたが（Lalou 1955）、日本・中国の学界ではあまり知られておらず、また時代の制約もありその解釈も改善の余地があった。そこで、山口氏は新知見と独自の見解をもって全面的に再解釈しなおしたのであり、氏の研究により、当文書の重要性が日本・中国で広く知られるようになったのである。

さて、その P.t.1089 には万戸、万戸長も登場している。山口氏は当文書に現れる万戸と中央チベットの組織であるル（ru）とを比較検討する。その上で、万戸は軍千戸が 10 集まったものではないと指摘し、その属下には民戸と 3 ないし 5 の軍戸を属し、万戸長は主に民政を担当していたとする（山口 1981, 6）。

山口氏の研究によって、今まで茫洋としていた万戸の姿が幾らか明確になった。しかし私見によると山口氏の説は若干の修正が必要であるし、またトゥッチ・佐藤両氏が大まかに指摘した通り、吐蕃の軍事体制は明らかに北方遊牧国家のそれと類似するのであるが、そのような体制上において吐蕃の万戸とはどのような位置づけにあったのか、考察を進める必要がある。以下、先行研究の成果を検証しつつ、考察を進めていきたい。まず、吐蕃の軍事行政体制であるルと軍管区について説明しておこう。

2　ルと軍管区

吐蕃の中央地域、つまりチベット高原には、幾つかのルが置かれた。ルは今のところ 5 つ確認されており（中ル、右ル、左ル、支ル、スムパのル）、各ルには平均して 8 つの軍千戸、1 つの小千戸、1 つの親衛千戸がある(2)。4 軍千戸づつで上手、下手に分割され、それぞれにル長（ru dpon）がいた。ただし、上述のル制の姿はあくまで「平均的」な姿であり、実際には 1 ルの軍千戸数は変動していたようだ。支配下の一般民衆は基本的に軍戸（rgod）・民戸（g-yung）に分けられ、軍戸は軍千戸に属し、民戸は軍戸を支える職能集団であったことが分かっているが、民戸については未解明な部分が多い(3)。

周辺地域では、直接・間接統治がとられた(4)。直接統治地域では、軍管区（khrom）が置かれたことがウライ Uray, G. によって明らかにされた（Uray 1980）。1 つの軍管区には、およそ数個の町が属し、例えば瓜州軍管区では首府の瓜州と、沙州、粛州が属す。各都市はチ

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

ベット人官僚のツェジェ（rtse rje.「節児」）が治め、そして軍管区全体を統括する長としてル長（ru dpon）または将軍（dmag dpon）がいた。一般の被支配民には軍戸・民戸の区分があり、沙州では3つの軍千戸、1つの民戸集団が確認されている。幾つかの軍管区で1つの「国」（khams）を形成したと考えられ、例えば瓜州軍管区の場合はデ国（bde khams）に属していた。

問題は、このような行政組織において、万戸はどこに位置するかということである。以下、まず中央地域の万戸を確認し、その次に周辺地域の万戸について見てみよう。

3　万戸の種類

3.1　中央の「万戸」　——「シャンシュン万戸」——

中央地域にて「万戸」の可能性があるのは、*LDE'U*1 に登場する「シャンシュン万戸」（zhang zhung khri sde）ただ一例のみである。

> チベットとトルコの境に上手シャンシュンの5千戸があり、'o co bag で1つ、mang ma bag で2つ、snye ma bag で3つ、rtsa ma bag で4つ、ba ga 小千戸で5つである。チベットとスムパの境に下手シャンシュンの5千戸があり、gug ge と gu cog の2つ、spyir rtsang と yar rtsang の2つ、spyi ti 小千戸で5つである。これが**上手下手シャンシュン万戸の10千戸**（zhang zhung khri sde stod smad kyi stong sde bcu）である。
>
> (*LDE'U*1, 259. 3–6)

> チベット4ル、**上手下手シャンシュン万戸**（zhang zhung khri sde stod smad）、スムパの支ルをあわせたものを、「チベットの60千戸」と言う。
>
> (*LDE'U*1, 259. 15–16)

シャンシュンの10千戸はその内包する千戸数からみておよそルと同等であるかそれに準じるものと考えられてきた(5)。今までの研究がこの記述に言及しないのは当時知られていた資料が *DPA'-BO* のみであり、そして上に引いた *LDE'U*1 とほぼ同じ文言が *DPA'-BO*（1: 20a2–3 または 2: 187–188）にあるにも拘わらず、"khri sde" とは記されていなかったからである。1987年に *LDE'U*1 が出版され、はじめてシャンシュン10千戸が「万戸」であるという記述が世に出たのである。問題は、この *LDE'U*1 の記述が信用できるかどうか、である。もし *LDE'U*1 の記述をそのまま採れば、万戸とは文字どおり10の軍千戸を擁し、実質的にはルと同じ規模を持つ組織だったことになるが、ただ注意すべきは、このシャンシュン万戸の姿と中央アジア地域に現れる万戸とが全く異なる姿である、ということである。以下、中央アジア出土文書に基づき周辺地域の万戸について考察し、その後にシャンシュン万戸に戻ろう。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

3.2 周辺地域の万戸

中央アジア出土文書からは、多くの万戸の存在を確認できる。例えばP.t.1089には、次のような一節がある(6)。

71–73 slad cad lho bal gyi nang nas bskos pa' / khrI dpon la stsogs pa / g-yu pa gser pa'i / gong du dmag pon chungu mchIs par / zhang btsan bzang dang / zhang khrI brtsan dang zhang rgyal tsan dang / zhang khri dog rjes mchid kyIs bcade / khri sde re re / phyag rgya re re stsal ces gsol //

71-73「今後、蛮夷のうちから任命されたトルコ石・金位階の万戸長などの者たちよりも上位に小将軍が位置するよう、尚ツェンサン・尚ギェルツェン・尚ティドクジェが協議し決定して、それぞれの万戸に命令をそれぞれ与えて欲しい」と【小将軍が】奏上した。

(P.t.1089 ll.71-73)

万戸において、小将軍が万戸長よりも上位にあるべきである、と主張している。ここに「それぞれの万戸」とあることから、複数の万戸の存在を確認できる。以下、現在確認できる万戸を集団ごとに挙げてみよう。

・トンキャプの万戸

所謂『王統紀』(P.t.1287+ch.xvii.2) には、チソンデツェン（756–797）の頃、770年代後半吐蕃の河西方面侵攻の時期のころとして

chab srid che ste long shan la rgyud yan chad / pyag du bzhes nas / mthong khyab khrI sde lnga btsugs / bde blon khams ched po gchig gsar du bskyed do //

領土は大きくなり、隴山山脈までを御手に入れて、5つのトンキャプの万戸を建てた。大デロン国を新たに生じさせた。

(P.t.1287 ll.383–386. 写真：*Choix*2 pl.571.)(7)

とある。また、P.t.1083はロンチュの大軍管区から沙州に宛てられた公文書で、その内容は、チベット人役人が沙州の婦女子をだまして本国に連れ帰るので、禁じるよう沙州の漢人たちがお上に求める、というものであるが、その中に

mthong khyab gyi bu sring lta bu / gzhan du gnyen 'tshal du myi gnang ba dang sbyar zhing // khri sde'I nang du dga' gnyen 'tshal bar / gthad du ci gnang zhes gsol lo //

トンキャプの婦女子のように、他【地域】に婚姻を求めることが許されないことと照らし合わせて、【沙州の】万戸の内で良い縁を求めることをどうかお許しください。

(P.t.1083 ll.5–6. 写真：*Choix*2 pl.429)(8)

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

とあり、トンキャプの万戸があったことが間接的に分かる。

トンキャプが何を指すのかは色々議論があったが、山口氏（1969, 51 n.109, 110; 1981, 5–6）によって漢語文書に現れる「通頰」と同定され、特定の（部族？）集団であるとされている(9)。彼らの万戸が河西回廊近辺に置かれていたと考えられるが、具体的に何処にあったのかは未解明である。

・アシャの万戸

アシャ（'a zha)、漢語史料でいう吐谷渾は 7 世紀後半には吐蕃支配下に入り、青海から河西回廊に至るまで幅広く分布していた。P.t.1222 はレクツェー文書（glegs tshas)(10)であるが、その内の一節には

> 'a zha khri sde gsar gyi khrid pon khri spyan dang / khrid dpon gyi yi ge pa la spring ngo /
> アシャの新万戸の万戸長・万戸都護と、万戸長書記に手紙を出す。
>
> (P.t.1222)

とある。また、ミーラーン出土の木簡にも、

> 'a zha khri sde stod pa rkya la gtogs pa
> キャ(11)に属するアシャ上手万戸
>
> (M.I. xxviii.1. Thomas 1951, 30. 写真: Thomas 1955, pl.13–1. 一部引用)

とある。「新万戸」という文言からは「旧万戸」が、また「上手万戸」から「下手万戸」の存在がそれぞれ推測でき、幾つかの万戸が形成されていたことを窺い得る。

・漢人の万戸

管見のおよぶ限り、漢人万戸が確認されるのは、沙州、涼州（＝カルツェン)(12)、ドゥクチュン（drug chung, dru gu chung）の 3 地である。P.t.1089 にて沙州、涼州に万戸が置かれていたことが確認できる、一方、ドゥクチュンの万戸は P.t.1120 に確認される。詳細は後述する。

以上の事例により、吐蕃の行政体制において万戸が共通した行政単位であったことが見てとれよう。行政上、万戸は重要な地域区分として機能していたようで、例えば P.t.1083 上引箇所では、万戸内で婚姻関係を結ぶことが取り決められていたし、先ほど引用した P.t.1089 の一節においても、万戸が独立した一行政単位として認識されていたことが分る。

また一方で、沙州、涼州のように既存のオアシス都市がそのまま一万戸とされている。それは裏を返せば、オアシス都市のような人口密集地域は、およそそれぞれ万戸として区分されていたことを示唆する。つまり既存の集団、地域にそのまま新たに万戸という組織をかぶせていたと考えられるのであるが、当然ながら各集団、地域によって人口規模は異なるはず

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

であって[13]、その結果各万戸によって規模に相当違いがでたはずである。つまり万戸は規模において融通の利く組織であったことになる。次章、万戸の規模についてもう少し詳しく見てみよう。

4　万戸の規模

トーマスは万戸を "a 10,000 district" と訳す（Thomas 1955, 118）。万戸の下部組織となるべき組織、千戸（stong sde）は、文字通り 1,000 の戸で構成されることが既に明らかとなっているので（Takeuchi 1994）、一見その訳は文字通り受け取ってよいようにみえる。また、トーマスがジャイルズ Giles, L. と共に研究した敦煌出土チベット語－漢語対訳語彙集においては

khri dpon = 'i man zhin dzyang

（S.2736 ll.8-9. Thomas and Giles 1948, 756 No.40.）

とある。khri dpon が khri sde の長であるのは言うまでもなく、またチベット文字により表音された漢語である 'i man jin dzyang について両氏は「一万人将」という漢語に還元している。両者の還元が正しければ、khri dpon とはまさに 10,000 人の軍隊の長と言うことになる。

しかし先に述べた通り万戸は到底そのような整然とした姿ではない。S.2736 の例はおそらくチベット語の逐語訳的なもので、実情を反映したものではないのだろう。その点山口氏（1981, 6）が「軍戸の『千戸』が 10 集まって成立しているものではない」という指摘の通りである。

さて、山口氏（1981, 6）は、「『万戸長』は、少なくとも軍の千戸 3 乃至 5 と共にあった『民戸』（g-yung gi sde）の支配者であり、その権限は『軍戸』の民政的な被統治部分に及んでいた」とも推測する。万戸内に民戸が含まれているとする点は、軍戸・民戸部落の両方が置かれていた沙州が万戸であることからも、十分首肯できる。しかしその万戸内に含まれる軍の千戸の数が「3 乃至 5」である、と限定するのは問題があると思う。

まず上限の「5」であるが、P.t.1089 に引用されたカルツェン軍管区の役職序列表には、序列の順番が最上位から

ル長（ru dpon）－万戸長（khri dpon）－大守備長（dgra blon chen po）－節児黄銅字位者（rtse rje ra gan pa）

（P.t.1089 ll.36-37）

とある。ル長は軍管区の長だが、万戸長はそれよりも下位にある[14]。中央においては、ル長は 4 千戸から 5 千戸[15]を率いる。そこで万戸長も 5 千戸まで率いるはず、と山口氏は推測したのであろう。一方の「3」とは、具体的には沙州の場合である。確かに沙州には 3 つの漢人軍千戸（stong sar, rgod sar, snying tshoms）があったのだが、問題は、沙州には軍千戸が 2 つ（stong sar kyi sde, rgod sar kyi sde）の時期もあったことで、後に snying tshoms kyi sde が増設されて 3 つになったのである（岩尾 2003, 9–14）。つまり万戸の持つ千戸の下限は 2

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

千戸であってもいいわけであるし、また万戸における軍千戸の数は可変とも言える。それどころか、前稿で筆者が提示した、占領地域の住民ははじめ民戸として登録された後に一部が軍戸として選抜された、という説（岩尾 2003, 22–26）が正しければ、当初沙州の万戸には軍戸が 1 つも無かったということになる。つまり、万戸の規模は、軍千戸とは必ずしも関係がないということになるのである。先ほど漢人万戸について述べたとき少し言及した、ドゥクチュンの万戸は、筆者の考えを補強する好例である。この万戸は収税に関わる文書 P.t.1120 の 7–8 行目に現れる。

> 7-8 rkya nyis brgya' mchis pa las/ slad kyis drug chung kyI zhing dmag nI rgya khrI sde spyi bskor te zur las bchad nas/ / dpya' bde gams su 'bul bar chad pa dang/ mnabs tog gI shing ra'I spyan zigs kyi lhag nas su bsgyur ba las rin kha bstan te/ / （後略）
>
> 7–8【ドゥグチュンに】200 のキャがあるので今後はドゥクチュンの zhing dmag（＝屯田兵？）は漢人万戸をまとめて形成し【沙州とは】別に処理して、税をデカムに献じるよう決定した分、そしてナプトク(16)の柵囲への捧げ物の余剰を大麦に換算した分から、【税の】価を受け取る。
>
> (P.t.1120 ll.7–8)

ドゥクチュンはミーラーン、敦煌出土両方のチベット語文書にしばしば現れる地名だが、詳細な位置はいまだ不明である(17)。上の記述から判断する限りドゥクチュンには 200 のキャがあり、そこに新たに漢人の万戸が作られたのである。キャ（rkya）は従来 rgya「漢人」と混同されてきたが、筆者の見るところ実際には吐蕃の土地制度のひとつであり、この場合は土地の丈量単位であり、区画された耕作地のことも指すようだ。キャについての詳細な考察は他稿にて行う予定なのでここでは詳しく述べないが、本稿に関することについて言えば、沙州の 3 つの軍千戸には併せて 684 のキャがあり、また P.t.1120 によればその内の 1 つトンサル千戸には 232.5 のキャがあった(18)。つまり 1 つの軍千戸には約 230 のキャがあった計算になる。

注意すべきは万戸内にあるキャの数である。約 230 のキャで軍千戸が 1 つ作ることが出来るわけであるから、ドゥクチュンの万戸における 200 のキャとは、1 軍千戸を形成するときに必要な広さにも満たない。更には、もともとドゥクチュン万戸は屯田兵のみで構成され、軍千戸はそこには存在しない。万戸は千戸の上部組織として機能するが、その下に軍千戸があるとは限らないし、また一軍千戸分ほどの耕地があれば、形成されるのである。

以上、周辺地域の万戸について考察してきた。今まで得られた万戸像を踏まえて中央地域のシャンシュン「万戸」を見直してみると、両者の姿が全くかけはなれていることに気づく。そもそもシャンシュンのように 10 千戸を含むのが万戸本来の姿だと仮定すると、組織としてルとの差異がどこにあるのか不明であるし、また周辺地域の万戸では規模が小さ過ぎ、むしろ軍管区くらいの規模があって然るべきということになる。やはりシャンシュンは正真の「万戸」ではなく、ルとは明記されないもののルに準じる存在だったと考えるほうがよい。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

先述の通り、シャンシュン 10 千戸についての情報が載るのは *DPA'-BO* と *LDE'U*1 の両書だが、*DPA'-BO* には全く khri sde の文字は無い。*DPA'-BO* は確実に *LDE'U*1 を引用しており、また該当箇所は *LDE'U*1 とほぼ同文を載せるにも拘わらず、である。これは何故か。「千戸」が 10 集まれば「万戸」であるという類推は簡単に成り立つ。筆者は、現行 *LDE'U*1 の「khri sde」とは、説明的に付加された語であるに過ぎず、本来の「万戸」とは無関係であると考える。*DPA'-BO* が現行 *LDE'U*1 とは別系統の写本を引用したのか、それとも著者の判断により「khri sde」の文字が削られたのかは分からない。しかし結果として *DPA'-BO* は該当箇所については正しい形を伝えたのである。

5　万戸から見た吐蕃と北方遊牧国家

さて、このような規模に幅のある組織に対し、何故 khri sde という呼称がつけられたのだろうか。当時 khri が実数としても使われていたことは、チベット語－漢語対照語彙集に、khri dpon が「一万人将」と訳されていたことからも確実である一方、実態としては khri sde が実数の一万でないことは先述の通りである。つまりこの khri は、「多数」も同時に意味すると考えるべきものであろう。しかしこの khri sde の組織形態は、stong sde の stong が正しく「1,000」であることと対照的である。吐蕃支配下の敦煌に置かれた漢人千戸にはツェン（tshan）が約 20 あり、1 ツェンには約 50 戸が属していた（Takeuchi 1994）。多少の揺れはあったとしても千戸は内包する戸により一定規模を保ったはずである。先ほど言及した、1 千戸が平均して 230 のキャを有することもまた千戸が一定規模を有した証拠であり、また実質的な軍隊単位もやはり千戸なのである（岩尾 2000, 21–25）。つまり曖昧な万の組織の下に実質的な千の組織があったことになるが、実はこれは遊牧国家の十進法的軍事制度の特徴的な姿である。

そもそも万を以って一個軍隊とする制度は匈奴の「万騎」が最も早く知られる[19]。

> 置左右賢王、左右谷蠡王、左右大将、左右大都尉、左右大当戸、左右骨都候。（中略）。
> 自如左右賢王以下至当戸、大者万騎、小者数千、凡二十四長、立号曰万騎。
>
> （『史記』匈奴列伝（9–2890））

ここで注意すべきは「万騎」に内包される軍隊が数千から万騎と幅があったというところである。

匈奴以降幾つもの遊牧国家が北アジアに生まれる。しかし十進法的軍事編成は、柔然にその一端がうかがえるものの[20]、他の遊牧国家については史料に現れない[21]。確実にその存在を史料に見ることが出来るのはモンゴル帝国からである。モンゴル帝国の軍事組織が十戸（harban）、百戸（ja'un）、千戸（mingγan）、万戸（tümen）という整然とした十進法で構成されていたことはよく知られるが、興味深いことに、モンゴルにおいても実質的軍隊単位は万戸ではなく、千戸なのであった[22]。そして、モンゴル語の tümen は直接にはトルコ語起源であるが、少なくとも突厥碑文の頃から「一万」を指す一方で、また同時に「多数」を指す

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

語でもあったのである[23]。モンゴル帝国以降も北方遊牧民では集団を示すのに引き続き万戸が使われたが、一方、川本正知氏の網羅的な研究によって明らかになった通り、中央アジアではこのトゥメンが行政区分として広く使われるようになる（川本 2000）。吐蕃の軍事制度が北方遊牧国家のそれと淵源を一にするとしばしば指摘されてきたが[24]、万戸の姿もやはりその指摘を裏付ける事例の 1 つとして考えることができるのである。

結論

最後にまとめておこう。吐蕃の万戸はオアシス都市など人口密集地域に置かれた行政区分である。その規模は一定ではなく、少なくとも一軍千戸分（200 のキャ）の耕地があれば作られたことが確認できる。khri dpon は当時においても一万人将と漢訳され、その一万という意味は意識されていたが、事実上は khri は実数としてでなく「多数」という程の意味合いしかもたず、実際に 1,000 の戸を擁する千戸とは異なっていた。そしてこのような「万」のあり方は吐蕃のみの特徴ではなく、いわゆる遊牧国家に共通するものであり、吐蕃国家もその体制を継承していた 1 つの証拠として考えられる。

以上、万戸について考察してきたが、もちろん全ての問題が解決したわけではない。まず、中央地域の万戸について、周辺地域の万戸から類推すると、ルと千戸の中間組織として、人口密集地に置かれたと思われるが、残念ながら現時点では資料が無く、後考を俟たざるを得ない。また、万戸内における権力構造については、更なる研究が必要である。一見万戸のトップは万戸長であるべきと思われるが、実際にはツェジェ（rtse rje）が沙州万戸の軍政を掌り、万戸長は民政長的な役割を担っていたようだ（山口 1981, 6）。両者の役割の詳細、そのように分担するに到った経緯などほとんど未解明のままだが、この問題は万戸のみならず吐蕃の官僚制度と密接に関わっているようで、紙幅の関係から今述べることは出来ない。別の機会に考察したい。

略号表

『魏書』 『魏書』全 114 巻、中華書局版、北京、1997（初版: 1974）。

『史記』 司馬遷『史記』全 130 巻、中華書局版、北京、1982（初版: 1959）。

『通典』 杜佑『通典』全 200 巻、中華書局版、北京、1988。

*Choix*2 Ariane Spanien et Yoshiro Imaeda, eds. *Choix de Documents Tibétains conservés à la Bibliothèque Nationale*. Tome II. Paris: Bibliothèque Nationale, 1979.

*Choix*3 Yoshiro Imaeda et Tsuguhito Takeuchi, eds. *Choix de Documents Tibétains conservés à la Bibliothèque Nationale*. Tome III. Paris: Bibliothèque Nationale, 1990.

DPA'-BO dpa' bo gtsug rag phreng ba. *chos 'byung mkhas pa'i dga' ston.*
1: New Delhi, 1962（Ja 章）.
2: 全 2 巻、民族出版社、北京、1986。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

*LDE'U*1 mkhas pa lde'u. *rgya bod kyi chos 'byung rgyas pa.* Lhasa: bod yig dpe rnying dpe skrung khang, 1987.

参考文献

中国・日本文

石川巌

2003 「帰義軍期チベット語外交文書 P.T.1082 について」『内陸アジア史研究』18、pp.23–37、2 pls。

岩尾一史

2000 「吐蕃のルと千戸」『東洋史研究』59–3、 pp.1–33。

2003 「吐蕃支配下敦煌の漢人部落——行人部落を中心に——」『史林』86–4、pp.1–31。

内田吟風

1975 『北アジア史研究——鮮卑柔然突厥篇——』同朋舎。

栄新江

1990 「通頻考」『文史』33、 pp.119–144。

王堯・陳践

1983 『敦煌吐蕃文献選』四川民族出版社、成都。

1988 『敦煌吐蕃文書論文集』四川民族出版社、成都。

1989 「吐蕃職官考信録」『中国蔵学』1989–1、pp.102–117。

1992 『敦煌本吐蕃歴史文書』（増訂本）、民族出版社、北京。

川本正知

2000 「中央アジアのテュメンなる地域区分について」『西南アジア研究』53、pp.24-60。

黄布凡・馬徳

2000 『敦煌蔵文吐蕃史文献訳註』甘粛教育出版社、蘭州。

佐藤長

1958–59 『古代チベット史研究』上下、同朋舎 （Repr.1977）。

杉山正明

1997 『遊牧民から見た世界史　民族も国境もこえて』日本経済新聞社。

藤枝晃

1961 「吐蕃支配期の敦煌」『東方学報』31、 pp.199–292。

汶江

1987 「吐蕃官制考——敦煌蔵文巻子 PT1089 号研究——」『西蔵研究』1987–3、pp.40–48。

本田実信

1991 『モンゴル時代史研究』東京大学出版会。

山口瑞鳳

1968 「蘇毗の領界—— rtsang yul と yan lag gsum pa'i ru——」『東洋学報』50、pp.387–

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

455。

1980a 「吐蕃支配時代」『敦煌の歴史』(講座敦煌 2)、榎一雄編、大東出版社、pp.197–232。

1980b 「沙州漢人による吐蕃二軍団の成立と mKhar tsan 軍団の位置」『東京大学文学部　文化交流研究施設研究紀要』4、 pp.13–47。

1981 「漢人及び通頰人による沙州吐蕃軍団編成の時期」『東京大学文学部　文化交流研究施設研究紀要』5、 pp.1–21。

1983 『吐蕃王国成立史研究』岩波書店。

1985 「チベット語文献」『敦煌胡語文献』(講座敦煌 6)、山口瑞鳳編、大東出版社、pp.449–555。

熊文彬

1994 「吐蕃本部地方行政機構和職官考——tsha-bcu, mi-sde, yul-sde, yul-gru, yul-dpon——」『中国蔵学』1994–2、pp.51–58。

林冠群

2000 『唐代吐蕃的傑琛（rgyal phran)』蒙蔵委員会、台北。

欧文

Bacot, J., Thomas, F.W. et Toussaint Ch.

1940 *Documents de Touen-houang relatifs à l'histoire du Tibet*. Paris: Libraire Orientaliste Paul Geuthner.

Clauson, G.

1972 *An Etymological Dictionary of Pre-thirteenth-century Turkish*. Oxford: Clarendon Press.

Lalou, M.

1955 "Revendications des fonctionnaires du Grand Tibet au VIIIe siècle." *Journal Asiatique*. 243, pp.171–212.

Takeuchi, T.

1994 "*TSHAN*: Subordinate Administrative Units of the Thousand-districts in the Tibetan Empire." In *Tibetan Studies: Proceedings of the 6th Seminar of the IATS*. Oslo. pp.848–862.

1995 *Old Tibetan Contracts from Central Asia*『中央アジア発現古チベット語契約文書』大蔵出版。

Thomas, F. W.

1951 *Tibetan Literary Texts and Documents concerning Chinese Turkestan*. vol.2. London: Royal Asiatic Society.

1955 *Tibetan Literary Texts and Documents concerning Chinese Turkestan*. vol.3. London: Royal Asiatic Society.

1963 *Tibetan Literary Texts and Documents concerning Chinese Turkestan*. vol.4. London: Royal Asiatic Society.

Thomas, F. W. and Giles, L.

1948 "A Tibeto-Chinese Word-and-Phrase Book." *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*. 12–3/4, pp.753–769, 2pls.

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

Tucci, G.

1949 *Tibetan Painted Scrolls*. 3 vols. Rome.（Repr. 臨川書店、1980）

Uebach, H.

1997 "Small Units in the Territorial Division of the Tibetan Empire（7th–9th c.）." In *Tibetan studies: Proceedings of the 7th Seminar of the IATS*. vol. 2. Wien. pp.997–1003.

Uray, G.

1980 "KHROM: Administrative Units of the Tibetan Empire in the 7th-9th centuries." In *Tibetan Studies in Honour of Hugh Richardson*. M. Aris and Aung San suu Kyi (eds) Warminster. pp.310–318.

1991 "The Location of Khar-can and Leng-cu of the Old Tibetan Sources." In *Varia Eurasiatica*. Szeged: Department of Altaic Studies. pp.195–227.

注

(1) 但し、佐藤氏はそのすぐ後で「実証はないとしても、トゥッチのごとく吐蕃時代にこのような組織があったものと見てよい」と述べており、トゥッチに全面的に反対しているわけではない。

(2) この他にシャンシュンの上手5千戸、下手5千戸があるが、それについては後述する。

(3) 民戸が職能集団であったことに関しては、山口（1983, 876–879）参照。熊文彬氏は *LDE'U*1 において各ルに16づつ挙げられる yul sde や yul gru といった集団を民戸と考えるが（熊 1994）、ウーバッハ氏はこれらは軍戸の下部組織である、とする（Uebach 1997）。なお周辺地域の民戸に関しては、拙稿（岩尾 2003, 22–25）を参照されたい。

(4) 間接支配地域の例としてはコータンがあげられる。なお、これら吐蕃の国家体制全体を俯瞰した研究として、林（2000）がある。

(5) 筆者は以前この *LDE'U*1 の記述に気づかず、その内包する千戸数からみて、シャンシュンもルと同等の集団であると倉卒に判断し、シャンシュンにもルがあるかのように述べた（岩尾 2000, 2）。後述する通り結果的にはその判断は正しいと考えるが、少なくともどの史料にも「シャンシュンにルがあった」と明記していないことは付言しておきたい。

(6) P.t.1089 には Lalou（1955）、山口（1980b）、汶（1987）、王・陳（1989）の諸訳が既にある。それらとの異同については、紙幅の都合上詳述しない。

(7) 参考までに P.t.1287 全訳の研究と本文引用箇所該当頁を挙げておく。Bacot, Thomas et Toussaint（1940, 115, 154）、王・陳（1992, 56, 130, 167）、黄・馬（2000, 292, 294）。また *Choix*3 に録文が収められている。

(8) 文書の全体訳は、山口（1985, 494–495）、王・陳（1983, 51–52）、王・陳（1988, 44–45）がある。

(9) またトンキャプについては栄新江氏に専論がある（栄 1990）。

(10) 写経生に配られる大判の写経用紙のうち、一枚は写経生が自由に使用できたが、これをレクツェーといった（Takeuchi 1995, 53-55）。

(11) Thomas（1951）は rgya と読むが、Thomas（1955）に挙げられた写真による限り rkya のようだ。

(12) P.t.1089 ll.36–43 にカルツェン軍管区（mkhar tshan khrom）における役人の序列一覧表があるが、その中に万戸長も現れている（同 l.36）。なお、カルツェンが涼州にあたることは、Uray（1991）参照。

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Tibetan Studies

（13）例えば、『通典』巻 174、州郡 4（5-4552, 4556）には天宝 14 載（755）の統計に基づいた各地の戸口数が載るが、それによると沙州は戸 6,395、口 32,234、一方涼州は戸 25,693、口 128,192 とある。

（14）山口（1980a, 209–210）に全役職のリストがある。

（15）5 千戸というのは、おそらくシャンシュンの上手下手各 5 千戸を想定したのだろう。

（16）mnabs tog は不明。石川氏（2003, 35 n.33）は食料袋に関する語ではないかと推定する。

（17）Thomas（1951, 30, 40, 274）。Thomas（1963, 57）では a people（understood as 'Little Dru-gu'）とするが、上述の例からみて明らかに地名である。

（18）例えば P.t.1111 の 13 行目には「沙州漢人の三つの軍千戸に 684 のキャがあり」（rgya sha cu pa stong sde gsuM la rkya drug brgya' brgyad cu rtsa bzhi mchis pa）とあり、P.t.1120 の 8-9 行目には「漢人トンサル千戸 1 つにて、232.5 のキャあるのに対し課した分は」（rgya stong sar stong sde gcig la // rkya nyis brgya' sum cu rtsa phyed dang gsum chis pa la phab pa /）とある。

（19）杉山氏（1997, 131）は太子時代の冒頓が月氏から脱出したのち父の頭曼から「万騎」を委ねられていることに注目し、「人隊」が匈奴の草原統一前からあった可能性を示唆する。

（20）「北徒弱洛水、始立軍法、千人為軍、軍置将一人、百人為幢、幢置帥一人。」（『魏書』巻 103 蠕蠕伝（6-2290））。内田（1975, 284）はこの軍・幢の組織は北魏も有し、また匈奴に遡る十進法の軍隊編成と相通じるものである、と述べる。

（21）ただし、史料に現れないから存在しなかった、とは言い切れない。吐蕃はその好例であり、漢語史料にはル、万戸、千戸の存在を匂わせる記述は全く無い（岩尾 2000, 30）。

（22）モンゴルの千戸制については、本田（1991）、特に第 1 章 2 参照。

（23）tümen に関する議論は多数あるが、ここではトルコ語に限りまとまった記述をのせる Clauson（1972, 507–508）を挙げておく。それ以外の研究については川本（2000）があらゆる関連史料を引用しており参考になる。なお、Clauson はその起源が Proto Chinese の*tman ではないかというプーリィブランクの意見を載せる。漢語においても「万」が多数を示すことが想起され、興味深い。

（24）例えば Tucci （1949, 737–738）や佐藤（1958–59, 750–763）を挙げておく。

謝辞：

草稿の段階で、神戸市外国語大学武内紹人教授にいくつかのアドバイスをいただいた。記して謝す。なお本研究は，文部科学省の科学研究費補助金（特別推進研究（COE））「アジア書字コーパスに基づく文字情報学の創成（GICAS）」の「古代チベット語文献オンライン（OTDO）」プロジェクトで遂行している研究成果の一部である。

NII-Electronic Library Service